

2019 年 1 月 8 日

日本プロテオーム学会（2018 年～2020 年理事）
2019 年 第一回理事会 資料(議事録)

開催日時： 2019 年 1 月 8 日（火） 14:00～17:00

会場： 東京工業大学キャンパスイノベーションセンター(CIC)東京 5 階 501

参加予定者（50 音順，敬称略）：足立淳，荒木令江，石濱泰，植田幸嗣，大槻純男，奥田修二郎，小田吉哉，梶裕之，川島祐介，河野信，川村猛，紀藤圭治，木村弥生，久保田一石，小迫英尊，近藤格，榊原陽一，杉山直幸，高尾敏文，堂前直，肥後大輔，本田一文，松本雅記

欠席者（50 音順，敬称略）：小松節子，曾川一幸

1. 会長挨拶(石濱)

(1) 学会運営の基本方針と今後の運営計画などについて，以下の点について確認がなされた。

- ① 学会運営の事務委託をせずに，学会年会費を抑えるために，会員名簿管理や会計業務などを自分たちで行っている。そうした理事業務の効率化を図るために，各担当理事に主担当と副担当をおき業務の分担を進めている。
- ② 会計の透明化を進めるとともに，会計事務所と相談しながら昨年度から納税を開始した。
- ③ 国際化の一環として，アジア・オセアニア各国との交流を深めるとともに，国際学術誌の設立を進めたい。
- ④ 日本学術会議協力学術研究団体への登録を進めたい。

【報告事項】(2018 年の報告と 2019 年の計画について)

1. 学会運営全般

(1) 会員状況について以下の報告がなされた(松本)(資料1参照)。

- ① 会員数にはここ数年は大きな変化はない。
- ② 会員の管理として，規約改定を含めて管理体制を整えたい(審議事項参照)。なかでも不達メールと会費未払い会員が大きな問題であり，現在状況把握は大方できている。

(2) 会計について以下の報告がなされた(木村)。

- ① MSP2018 での収益について，参加者の会員数に応じて JPrOS と MSSJ で分配し，2,459,150 円が JPrOS に入金されることとなった。
- ② JPrOS の現貯蓄額は 10,009,134 円である。

(3) 学会誌について以下の報告がなされた(本田)。

- ① 2018 年は 1 号が 6 月に，2 号が 12 月に刊行され，計 7 名の方に執筆頂いた。一方で 2019 年 6 月号の執筆予定者は現時点で 1 名だけであり，若手の方を中心に執筆者を募りたい。

2. 行事報告

(1) JPrOS 2018 年大会 (MSP2018)について以下の報告がなされた(石濱)。

- ① AOHUPO 日本質量分析学会との合同大会として開催された。
- ② 参加人数は 817 名であり，217 のポスター一般演題が発表された。
- ③ 企業展示は 45 ブースが出され，協賛企業も 74 社にのぼった。
- ④ 約 500 万円の黒字となり，JPrOS と日本質量分析学会で参加者会員数に応じた分配を行い，それぞれの団体で今後納税をすることとなる。

(2) JPrOS 2019 年大会について以下の報告がなされた(榊原・大槻)(資料2参照)

- ① 日本電気泳動学会との合同開催であるが，会計および事務業務のほとんどは JPrOS が担当する。
- ② 10 月 14 日に宮崎で大会組織委員会の会合と会場の下見が行われた。

- ③ 企業展示ブースへの展示依頼ならびに協賛企業への協力依頼を行っている。
 - ④ 大会開催日の宿泊分は、旅行会社が抑えてしまっているため、現在は Web では空室のない状態である。日本旅行と相談中であり、大会ホームページ開設時には予約可能な状況にしたい。
 - ⑤ 初日の教育講演は磯辺俊明先生にお願いし、最終日の教育講演は中村和行先生にお願いする予定で、現在講演依頼中である。
 - ⑥ 小さい会場(収容人数は 80 名ほど)が二つあり、小さめのワークショップなどの企画が可能であるので、応募を募りたい。現時点では定量内部標準のワークショップが一つ企画されている。
 - ⑦ シンポジウムの演題は一般演題からも両学会のバランスを考慮しつつ採択する方針である。
 - ⑧ 大会ホームページは現在作成依頼中である。日時と場所ならびに企業協賛関連書式のダウンロードだけは、早い時期にアクセスできるようにしたい。
- (3) 学術企画活動について以下の報告がなされた(植田)(資料3参照)
- ① 日本生化学会での JPrOS 企画シンポジウムでは、100~150 名ほどの参加数であった。
 - ② 2019 年の日本生化学会にも応募する予定であり、主にプロテオームをベースとした臨床応用研究を実現してきた方を中心に、演者を予定している。
- (4) トレーニングコースについて以下の報告がなされた(曾川)
- ① 麻布大学と北里大学で昨年 9 月に開催された。実験内容としては試料のゲル内消化および溶液中消化を行った。
 - ② 参加者は 10 名であり、半数くらいは民間企業からの参加者であった。
 - ③ 質量分析での計測も行ったが、取得したデータの解析をトレーニング開催日に全参加者のデータについて行うことができず、試料前処理の良し悪しがあることが判明しないのが今後の課題である。
- (5) その他の活動
- ① 次期 HUPO 理事について以下の報告がなされた(石濱):引き続き山田哲司先生が選出された。一方で前期理事の小松節子先生は次点となった。今回の選挙ではアジア・オセアニア地域枠でオーストラリアから選出されたのが 4 名と多かった。HUPO への実質的な貢献や積極的な発言をしていくことが、今後日本からも安定して理事を排出するには必要と思われる。
 - ② 今年の KHUPO について以下の報告がなされた(石濱):3 月にソウルで開催されるが、JPrOS からの講演者の派遣について推薦者の報告がなされた。JPrOS 大会の実行委員長および運営委員を中心に選考するといった慣例に従い、大槻純男先生と太田信哉先生に依頼がなされた。
 - ③ HUPO イニシアティブ活動について以下の報告がなされた(石濱・川村):C-HPP の X 染色体(代表:石濱)とⅢ番染色体(代表:川村)を遂行しており、X 染色体は jPOST の活動の一環として継続すること、Ⅲ番染色体は既にレポートを報告しており今後も継続することが報告された。
 - ④ JPrOS イニシアティブ活動以下の報告がなされた(石濱):jPOST の第二期が 2018 年 4 月から 5 年間の予定で開始された。jPOST では、今後データベースジャーナルの刊行を計画している(審議事項参照)。

【審議事項】

1. JPrOS 2020 年大会について以下の審議がなされた(紀藤)(資料4参照)

- (1) JPrOS 2020 年大会について日程(2020 年 9 月 17 日(木)~18 日(金))と会場(両国, KFC Hall & Rooms 国際ファッションセンタービル)が提案され、予算収支案についても説明がなされた。収容人数は第一講演会場が約 400 名、第二講演会場は約 150 名であり、参加人数によっては第二講演会場の講演を映像中継可能な部屋を確保することが望ましいとの意見が出された。これも含めて、日程と会場が承認された。

- (2) 上記会場では会場費の事前支払いが必要となるが、学会会計と年大会会計は一体化されたことなどから、従来とは異なる会場費事前支払いについても承認された。

2. Journal of Proteome Data and Methods (JPDM)の刊行について(石濱)

- (1) 以下のような経緯および趣旨説明がなされた(石濱)。

- ① 前期理事会で刊行した日本プロテオーム学会誌は和文雑誌を選択したこともあり, JPrOS の設立趣意書にある英語版ジャーナルの刊行がこれまで懸案事項となっていた。
- ② オープンアクセス国際データベースジャーナルとしての JPDM では jPOST 投稿データと一体となっているメタデータやメソッドプロトコル情報の掲載を目的としている。
- ③ jPOST ではデータリポジットに付随するメタデータの質保証が一つの課題になっており, そのキュレーションにコストが最も割かれている。5 年間の第二期 jPOST が終了した後に, そのコスト削減をする必要があり, 質が保証されたメタデータの登録のモチベーションを研究者に持ってもらうことが, 本ジャーナル刊行の一つの大きな目的である。
- ④ 本ジャーナルの刊行は JPrOS のプレゼンスを示すと共に, 投稿者と読者の双方にメリットが期待できる。
- ⑤ J-STAGE が学術雑誌オープン化のコンサルティングを始めており, 3 月までの期間で採択されている。また科研費の研究成果公開促進費にすでに応募し, 最大で 3700 万円/5 年の予算を見込んでいる。
- ⑥ JPDM の HP を既に作成している。Editorial board (PXD のメンバーなど) や投稿規定などは科研費申請にあわせて既に計画・作成済みである。現時点では, 2019 年 10 月の創刊を目指している。

- (2) 経緯・趣旨説明に対して以下の意見交換がなされた。

- ① 査読基準の明確化や査読に必要となる人的コストを精査したほうがよいだろう。
回答: 人手がかかるものと自動化できるものを, これから明確にしていく予定である。
- ② 通常の学術論文と, データ論文の違いは根本的には何なのか。
回答: マテリアルズとメソッドの詳細は, 通常の学術論文では書き尽くされておらず, データ論文はその詳細な記載を求める。
- ③ 二重投稿や著作権については問題にならないか。
回答: 著者に著作権があるようにすれば, 著作権問題が解決するのではないか。
- ④ 論文刊行と jPOST のコスト削減は具体的にどうつながるのか。学会主催の雑誌なので科研費採択後の予算は学会が管理するのか。また将来的な経費は学会が負担していくのか。これらの点を踏まえて持続的な予算体制を考える必要があるだろう。
回答: 今後の重要な検討事項である。
- ⑤ 投稿の質を担保することへの留意も必要であり, そのために投稿料を設けるのも一案である。質が担保されない論文投稿数が膨大になり, JPrOS としても対応に苦慮し大きな負担になってしまう可能性を十分に想定しておく必要がある。
回答: 将来的には PXD や Proteome Informatics を進めてきた研究者を取り込んで, 国際的に進めていきたい。そのための準備として, Proteome Informatics の先駆者たちを Editorial board にすでに取り込んでいる。

- (3) 上記の意見交換を踏まえ, 具体的な雑誌像の検討を進め, 科研費不採択の際にもコストをかけずに着手可能なことがらを遂行し, 創刊の実現を目指していくこととなった。また状況をその都度理事会に報告するとともに, 意見集約を図っていくこととなった。

3. 日本プロテオーム学会会計規約(案)について提案がなされた(松本)(資料 5 参照)

- (1) これまで規約化されていなかった日本プロテオーム学会会計規約の原案が提案された。今後ご意見を集約したうえで, メール審議で承認を得たのちに, 学会ホームページに掲載していきたいとの報告がなされた。

4. 会員管理について以下の提案がなされた(松本)(資料1参照)

- (1) 会員管理の問題として, 不達メールと会費未払い会員などがある。今回, 退会などに関わる規約を改訂し, 退会手続きを見直したいとの提案がなされた。とくに退会手続きの対象となる会費未払

い期間を 3 年間とするとの規約案が提案され、承認された。一方で、除名ではなく資格喪失などの文言に変更すべきとの意見が出された。また資格喪失後に再び入会する場合は再入会もしくは新入会のいずれに該当するか、などの質問も出された。これらの意見を踏まえ、最終的な修正案を提案することとなった。

- (2) 名誉会員として、中村和行先生、磯辺俊明先生、谷口直之先生の推薦を考慮しており、今後理事会に正式に推薦する予定であることが報告された。また名誉会員として推薦する際の内規(退官後の年数、大会主催や学会賞授与を勘案するなど)の作成が提案され、今後内規(案)が理事会に挙げられることとなった。あわせて、名誉会員は総会に参加できないという現規定も検討事項として挙げられた。

5. 学会賞等の推薦について依頼があった(石濱)

- (1) 学会賞、学会奨励賞、学会研究開発功績賞、学会功労賞、の各賞の推薦依頼がなされた。あわせて、学会奨励賞の対象者はこれまでどおり、45 歳未満で第一著者 3 報以上を有する者を候補者とする事が確認された。

6. その他

- (1) 年大会要旨の J-STAGE への登録作業について以下の提案がなされた(石濱): JPrOS のホームページに要旨登録システムが作成されたため、今後は作業の難易度を見極めつつ、大会担当理事の役割として明確にしたい、との提案がなされ概ね承認された。
- (2) HUPO 理事の推薦について以下の見解が述べられた(石濱): 地域別の選挙でありアジア・オセアニア候補者には 3 名まで投票が可能である。日本から継続的に理事を排出するためには何かしらの戦略的が必要と思われ、ジェンダー枠や AOHUPO からの推薦枠も有効利用しながら、今後も推薦を継続していきたい。
- (3) トラベルアワードについて以下の意見交換がなされた: HUPO2019(オーストラリア・アデレード)および AOHUPO2020(韓国・釜山)でのトラベルアワードについて、今後連絡がある旨報告がなされた。あわせてトラベルアワードの年齢制限を実質的に外し、40 代もサポートの対象とすべきではないかとの意見も出された。
- (4) TPS(Taiwan Proteomics Society)との交流について、互いに招聘し合うことを進めていきたいとの見解が述べられた(石濱)。
- (5) HUPO2022 は韓国での開催が計画されているが、KHUPO から協力依頼がなされている旨報告があった(石濱)。